

第一章 古田校区

第一節 古田校区の概要

古田校区は、西之表市街地から県道七六号を南東方向へ約一〇キロ南下した、古田盆地に位置している。種子島でも珍しく海に面していない山間の地域である。

気候は、高温多雨で時期により霧の発生も多く、冬季は、降霜がみられ島内の中でも寒冷地である。地形は、中央部に古田盆地が広がり、その周りを台地や丘陵地で囲む山林地帯から成り立っている。地質は、肥沃な堆積層や粘土層が分布している。自然豊かで、山桜・河津桜・暖流桜・ソメイヨシノなど二カ



図8-28 古田校区の位置

月にわたり桜の花を楽しむことができる。五月に川脇川上流などでホタルの乱舞も楽しめる。川には、手長エビも生息し、野鳥や鹿等たくさん生き物と共生している。

古田音頭

作詞 濱島 勇
作曲 浦添 助直

- 一 山のなあ
山の古田は被霧カゲリに明けて
遠い深山とほやまに炭焼く煙
ひづめ鳴らして馬子唄荷馬車
山に立つ木の 山に立つ木の 逞たくましさ
(ソイヤナ ソイヤナ ガツツイソイヤナ)
- 二 お茶のなあ
お茶の古田は情けもあつく
あかねたすきの茶摘みの唄が
峰ねから峰へとあの娘むすめの恋情
お茶のおおりの お茶のおおりの ほのぼのと
(ソイヤナ ソイヤナ ガツツイソイヤナ)
- 三 寒さなあ
寒い古田は久時さまを
強く育てた古田の御前
あの子この子も霜しもけちらして
強くかしくく 強くかしくく 朗朗らかに
(ソイヤナ ソイヤナ ガツツイソイヤナ)
- 四 踊りなあ
調子そろえて横笛太鼓
いちよう色づきや鎮守ちんじゆの森に
年に一度の豊年祭り
古田名物 古田名物 獅子踊り
(ソイヤナ ソイヤナ ガツツイソイヤナ)

古田の全てが凝縮された「古田音頭」

第二節 古田校区の成り立ち

長禄二年（一四五八）、一代島主種子島時氏が古田村に仮住まいしたことが、『種子島家譜』に記述されている。この頃には少なからず古田村が存在したことがうかがえる。元禄二年（二六八九）種子島一八カ村、そのうち西之表七カ村の中に、古田村は、規模こそ小さいものの明記されている。その当時の人口は、四三人、石高五五石、牛馬頭数八頭とある。

明治十二年（一八七九）地租改正条例の公布に伴い実施された調査によると、当時の古田村の戸籍は、二七戸に過ぎなかった。この二七戸の村人を古有民こゆうみんと呼び、紀功碑にその名を刻し、令和になった現在でも古田村の礎を築いてくれたことへの感謝を込めた石碑祭りを実施している。

当時、古田村を開発発展させたいと願う古有民にとって、移住者を招き入れることが絶対条件であった。広大な共有林と、隣接する国有林は、移住者にとっても貴重な資源であった。

明治十九年の甌島からの移住が、古田村に新たな集落を形成する礎となり、その後全国からの移住者により、原始林の開拓が始まり新たな集落を形成していった。しかしながら、当時の苦勞は筆舌に尽くしがたい。

明治から大正へと時代は移り、古田村の豊富な水源と木炭により大型の製鉄所も建設された。昭和に入ってから、大量の木炭の需要により全国から移住者が増え、昭和三十年（一九五

五）頃までは、七つの集落がそれぞれに賑わった。また、水力発電所が建設されたことで種子島に科学の光がともされた。

昭和三十年以降の高度経済成長時代には、木炭から化石燃料への転換があり、製炭業のみで生活していた家族は、本土へと引き上げていった。少なからず土地を求めることができた区民

は、その後も歴史を受け継いでいる。

平成から令和へと人口減少の勢いはさらに加速している。



炭窯の高上げ

第三節 地名・字名

一字名

大字古田の小字一覧

高山崎、桑之本渡瀬、広掛、田代嵐、大川比良、坂口、笹之本、源四郎、向大田、中野、尾呂ノ平、白木野、鳥之巢、大田、前田、大溝口、野崎、五升苗、古川、橋口、城大路、長谷、中之園、樋ノ口、小田代、平松、田平、大渡瀬、塩スリ田尾、木引迫、野川、西之峰、小渡瀬、小野、小野平、甚五間伏、茶ノ木、木床、大五郎、登掛、大枯木、上清戸蔵、下清戸蔵、中路、後之林、山刀平、鹿之峰、大林、石ノ本、一位山、降掛、明泰寺、瀬戸、屋久川、一里山口

二地名

古田校区は、次の七つの集落からなる。

中之町

『種子島家譜』に長祿二年（一四五八）頃、中之町は、「城大路」という小字で呼ばれ、古有民が居住していたと思われる。

その他小字には、「長谷・中之園・樋之口・田平・小田代・古川・五升苗・橋口」などがある。

古田村の中心地であるこのあたりが、古田村発祥の地である。

昭和二十年（一九四五）の終戦を迎えた頃から、次第に中之町と呼ぶようになった。

昭和十四年に古田公会堂（中央公民館）が建設されてからは、中心地に住む中之町・村之町両集落の住民が共同で利用していた。同五十七年頃には独自の公民館建設の機運が高まり、念願が叶い同六十二年三月に現在の中之町公民館が新築落成された。

多いときには、七〇戸ほどの戸数であったが、令和五年（二〇二三）十一月末現在は、四六戸七八人が暮らしている。

村之町

古田校区の中心部を流れる川脇川沿いやその支流に沿って細長く人が居住している村之町集落。小学校や駐在所、古田中央公民館など多くの施設が存在する。小字は、「中路・白木野・後之林・源四郎・坂口」などがある。古くから生活を支えてきた田浦の水田も、現在では基盤整備が完了している。たくさん馬が飼育され二〜三の牧場があったという。「ホイトウ馬の



中之町公民館



村之町公民館

追い上げ」という伝説が残っている。また地域内には、「馬乗り場」と呼ばれる場所がある。

また、古田校区の守り神である豊受神社もこの地に建てられている。歴史的遺産として、たたら製鉄所跡、水力発電所跡がある。村之町公民館は、昭和六十一年に新築落成された。大正時代に一五

戸ほどであったが、令和五年十一月末現在は、四四戸八六人が暮らしている。

上之町

明治十七〜十八年（一八八四〜八五）に襲来した飢島台風の大被害により、同十九年四月に古田村に一〇戸の家族が移住することとなった。当時の古田村戸長であった榎本新喜氏をはじめとする区民各位による親身も及ばぬ歓迎と助力の甲斐もあって、慣れない深山の中で十軒長屋を建てるも、翌年には全焼してしまふ。想像を絶する苦難の連続であったことは言うまでもないが、何より一致団結し、戸建て住宅を築きながら開拓した

のである。

その後、他地区からの移住者も加わり現在の礎を築いた。古田の中心地から川脇川の上流にあたるため、上之町集落として繁栄してきた。

小字は、「小野平・小野・甚五間伏・大渡瀬・小渡瀬・西之峯・野川」などがある。

昭和二十八年に集落創設

記念碑を建て、同六十二年には移住一〇〇周年記念式典を挙行了した。また、同年に上之町公民館が新築落成された。

令和五年十一月現在、三四戸六六人が暮らしている。

番屋峯

番屋峯の地名は昔、東西の海を航海する船を見張る番小屋があったことから番屋峯とつけられた。この地が走り新茶の里となるのである。

明治三十五年に退官した初代郡長牧野篤好の郷里は静岡で、種子島がお茶栽培にとって適地であると伝えたことから、同四十二年に静岡から松下助七・栗田茂三郎・松下清作らが古田の



上之町移住記念碑

地を訪ねてきた。当時の古田区長熊澤助次郎と懇談し、番屋峯の森林土地について借地契約を結び、伐採後は茶畑に開墾し、茶業を広めることとなった。次々に静岡・徳島・桜島などから移住者が増え、現在の茶業の礎を築いた。

昭和二十五年茶業記念碑を建立し、平成二十一年(二〇〇九)十一月には、移住一〇〇周年記念式典も盛大に挙行された。

小字は、「木床・大五郎・登掛・大枯木・上清戸蔵」などがある。

番屋峯公民館は、昭和三十八年に新築、平成二年に増築し現在に至る。

桜島からの移住者はこの地を離れ、令和五年十一月現在、二九戸五九人が暮らしている。

二本松

明治の末期頃に、甌島・出水・四国から移住が始まった。大正三年(一九一四)の桜島大爆発により、屋久川地区に二戸の移住があった。移住にあたっては、県が「屋久川」字の国有林地を移住地と選定し、開墾が始まった。しかしながら、大原生林の開墾は想像を絶する苦労があったことは、のちに半数がこの地を離れたという事実からわかる。その後も移住は続き、大島・川内・宮崎・伊作と全国各地から周辺地に移住者が暮らした。移住当時は、特別な集落名はなく、それぞれの小字で呼んでいたが、中心地に夫婦松めおとまつと呼ばれる松が二本立っており、

いつしか二本松と呼ぶようになった。

小字は「屋久川・一里山口・石ノ本・鹿之峯・一位山・降掛・明泰寺」などがある。

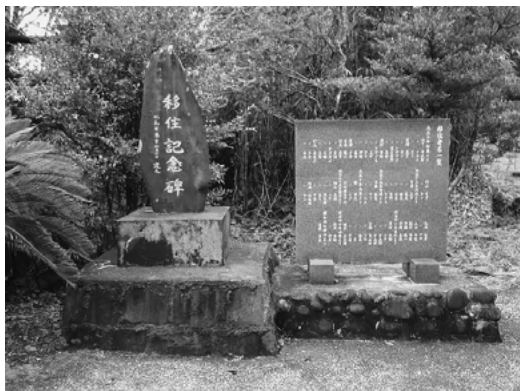
昭和三十三年に移住記念碑を建立し、公民館は、同五十五年新築落成された。

令和五年十一月現在は、一七戸二七人が暮らしている。

十三番

明治三十五年、西之表の野間に整備された県道工事の際の請負番号がそのまま地名として残ったものである。

この地域の小字は、「瀬戸」である。明治三十六年頃、田上義夫夫妻



二本松移住記念碑



番屋峯移住記念碑



十三番移住記念碑と陸軍演習記念碑

が熊野神社へ参拝に出かけた際に、十三番付近に耕地に適した土地があり安住の土地として最適と思い、妻の実父である是枝家と移住したのが始まりである。

田上家は、安城出身の由緒ある家柄であり、古田の古有民である。是枝家は、甌島から古田の曲川に移住した家族であった。焼き畑農業で耕地を増やしなが

需要が高まった木炭製造のための炭焼きが盛んになり、「花みのう」と呼ばれる種子島レーダー付近には、福岡からたくさんの方が移住し、炭焼きを生業とする人々で賑わった。十五番には、大島からの移住者もあり。多いときには、十三番集落も六十数戸になったという。

移住者の中に南種子の人がおり、ヤートセ・なぎなた踊りなどの郷土芸能も伝えられたという。

しかし、木炭から化石燃料へと時代が変化したことで需要も減少し、次から次へとこの地を離れていった。

昭和十年に移住記念碑、陸軍演習記念碑を建立し、十三番公民館は、同五十三年に新築落成された。

令和五年十一月現在、一一戸十六人が暮らしている。

平 松

古田校区の玄関に位置する平松集落は、大正

三年の桜島大爆発により、県が「平松」字の国有林地を移住民地として選定し、二五戸が移住したことにより始まる。この地も大密林であり想像をはるかに超える苦労があったに違いない。食料を求めて古田の村や遠くは安城まで往来し、イモを主食としながら苦しい生活を耐えしのぎ家族を守った。しかしながら豊富な森林資源のもと木炭の需要の高まりで全ての世帯が製炭業に従事し、製炭専業の集落となった。経済的な余裕ができたことで昭和九年には、平松公民館の落成



広掛開墾記念碑



平松移住記念碑

をみる。他県からの移住者もあり、多いときには三〇戸を超える集落であった。

広掛地区には、明治三十二年に、開拓団も入植し、大正八年に杉山の高台に開墾記念碑が建立されている。碑文によれば淡路の国三原郡からの移住であったようだ。現在は、広掛地区に居住している者はいない。

昭和三十年以降は、他集落と同様、生活環境の変化から製炭専業で生計を立てることが厳しくなり島外へと離れていった。

小字は、「平松・笹之本・高山崎・桑之木渡瀬・広掛」などがある。

大正三年に移住記念碑を建立し、現在の公民館は、昭和五十七年に新築落成された。

令和五年十一月現在、七世帯一人が暮らしている。

第四節 歴史的特殊性

豊かな自然と歴史を持つ古田校区では、これまで数々の産業が興されてきた。古田校区の歴史的特殊性として、産業の歴史を紹介する。

製鉄の歴史

種子島における砂鉄製鉄の歴史は古く、最も古い伝承を持つとされる古田では、六〇〇年以上も前から操業していたという。古田で製鉄が行われていた理由は、良質の木炭と豊富な水量である。原料となる砂鉄は、花里浜・石寺浜・長浜・能野浜などで採集され、馬によって古田まで運ばれていた。

古田の製鉄地は、上之町・春之園・村之町・旧中学校入口前であり、付近からは鉄滓が多く見つかった。水車を動かすための水路が現在でも残っている。

大正六年（一九一七）、八代祐基により五ト熔鉱炉が建設され、砂鉄による製鉄が操業された。当時は、操業に携わった職人らで賑わった。

古田水力発電所跡

豊受神社から川脇川沿いを下流へ四キロほど下った場所に発電所跡地がある。古田水力発電所は、昭和二年（一九二七）四月、種子島電気株式会社設立により種子島第二発電所（出力六



古田水力発電所

○(キワツ)として運転が開始される。古田字「大川比良」に取り入れ口を設け、川脇川から毎秒一八・三トの水を引用し有効落差五〇ミを得て、古田字「田代嵐」に設置された。

発電所用水ダムから発電所まで約一キロあり、その間には四つのトンネルがあった。

昭和二十六年五月には、九州電力株式会社に統合され、同四十六年に閉鎖された。

番屋峯の製茶

『番屋峯百年のあゆみ』によると、明治三十五年（一九〇二）熊毛郡の初代郡長であった牧野篤好は、退官すると郷里の静岡に帰り、種子島が茶業の適地で将来性があると静岡県茶業家に移住経営を勧誘した。この勧誘から六年後の明治四十一年に松下助七が単身種子島に渡り、伊闕方面と古田方面を視察し、適地であると確認したことに始まる。

明治四十二年、牧野の紹介状を携えた松下助七・栗田茂三郎・松下清作らが、古田番屋峯を移住地と定め、当時の古田校区長熊澤助次郎と懇談し、了承を得て借地契約を結んだ。

当時の借地契約は、借地料一〇円、当たり三〇銭、三〇畝を上限とし、茶業は薪炭を利用することから、古田共有林地一〇〇〇畝の雑木は自由に伐採できるといふ内容だった。

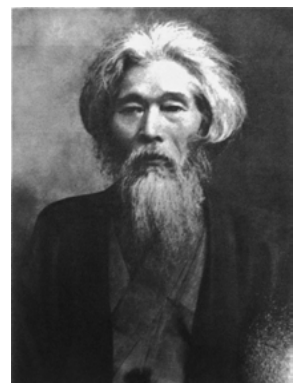
明治四十三年に、澤柳茂三郎・松下仙次郎・松下惣一らが、翌四十四年に、杉森伊八・松下国平らが移住した。

土地を借用したのち山林を開墾し、お茶の播種が行われ、茶園の造成を進めた。お茶が成長するには多大な費用と時間がかかり、当時の困難な生活に拍車をかけた。

明治四十三年三月には、植栽面積一・五畝となり、古田校区の人々にもお茶の播種を勧めた。茶樹の生育も良好で、翌年三月二十五日には、少量ながらも走り新茶第一号を横浜市の大谷



茶業記念之碑



牧野篤好翁

嘉平商店に送り、一貫匁あたり五〇円の高値がついた。一年間の家計費が四〇円ほどの当時にあつて、一貫匁あたり五〇円の高額に驚愕し、新聞にも種子島の新茶が記事として掲載されたことは、多くの人々を感嘆させたことだろう。

このことにより種子島が茶業の適地であることが実証され、伝統的な野生茶樹の自然製法を一新し、生業としての基礎を築いた。開拓に努め、広漠たる原始林地帯も、緑のうねりも美しい集団茶園と化し、現代に至るまでの礎を築き上げたことは、後世に残る偉業の一つである。

第五節 戦争と疎開

学童疎開の記憶

昭和二十年（一九四五）三月十八日、太平洋戦争の戦火は一層激しさを増し、種子島においても空襲が始まった。戦火から子どもたちを守るため、集団学童疎開が遂行された。

『古田小学校創立一〇〇周年記念誌』に、その当時の様子が次のように記されている。

古田小学校の児童（二年生～六年生）の疎開先は、伊佐郡菱刈町方面であった。四月二十八日、西之表の栖林神社で両親と最後の別れを告げ乗船し、鹿児島へと向かった。寂しさのあまり泣きわめく児童もおり、本当に辛い別れであった。翌二十九日の朝、鹿児島に入港し、汽車に乗って目的地である菱刈へと向かった。その夕方、たくさんの受け入れ家庭が待つ小学校へ到着すると、いろいろな説明を受けた後、それぞれの家庭へと引き取られ、暗い夜道を急いで家路へと向かった。受け入れ家族は大変親切で、我が家に戻ったように思えた。しかしながら、夜がふけるにつれその優しさがなおさら両親を思い出すこととなり、布団の中で涙した。

小学校では、最初の頃は古田の児童同士で遊んでいたが、時が経つにつれ友達もでき、仲良くなれたという。しかし、

温かい家庭で過ごせたのは二カ月足らずだった。戦火が一段と激しさを増し、公民館での集団生活へと移った。生活は一変し、食べるものはおかゆが中心で空腹を満たすことはできなかった。学校での授業もできなくなり、山での授業が多くなった。空襲がそこまで近づいた八月十五日、終戦を迎えた。四カ月が長く感じた辛い記憶である。

神風の詩のこと（昭和二十年九月十七日 枕崎台風通過）

終戦後、空洞と化した傷心の日々を古田一位山の野戦兵舎の中で送っていた射場義清大隊長を、猛烈な台風が襲った。荒れ狂う桜の木を見ながら、これからの国の行く末を思い心は乱れていく。一本の桜の枝が折れたとき、次の詩は詠まれた。

神風今ぞ吹きぬ

射場義清 作

一、百雷落ちて一位山

二、昔元冠^(寇)国難に

神風今ぞ吹き初めぬ

民一切の私を忘れ

たたかひすんで神風は

すべてを捧げし其の時は

萬涙のんで吹き初めぬ

いはずも神風吹き荒れぬ

三、元冠^(寇)以上の国難に

四、今敗戦の大恥辱

神風なか吹かざらん

民一億の夫々が

或るつわものは叫べども

一意義に就く武士道の

遂に神風吹かざりき

悟りの道を開く時

五、神風遂に吹き初めぬ

枝もたわわに吹き初めぬ



誠の碑

ゆえ知らに涙は流る戦の
終りしるせし石に向えば

戦の終りしるせし島の石
来り仰ぐも後幾度か

（射場義清編『心の旅路』
一九七七年）

幹を斬られし若桜
打たるる姿に涙あり

おお再建の鐘は鳴る

（射場義清編『心の旅路』）

誠の碑

二本松の鹿之峰に東の海が見渡せる小高い広場がある。この丘に「誠」の文字が刻まれた巨石が存在する。この誠の碑は、太平洋戦争中、六〇〇人に及ぶ守備部隊を形成し、種子島の島民を守っていた、「独立混成第一〇九旅団独立歩兵第六八〇大隊（通称第一三五七三部隊）」の戦友が、一年半に及ぶ島民との心の絆と平和希求の証として、昭和二十年の終戦時にこの地で

大隊旗を焼きながら、巨石に「誠」の文字を刻したものであり、戦友会「石誠会」と島民を結ぶ心の墓標である。

昭和五十年十月五日、「時は流れて三十年心の戦友よ又集う種子島石誠会」という碑文が追加され今日に至る。現在は、「誠の碑」公園として維持管理されている。

古田校区では、毎年元旦に、「歩こう会」を開催し、この日から初日の出を拜むのである。

第八節 人 物

古田御前

古田御前は、国上村の黒木道純の娘で、十四代島主種子島時堯の側室で一六代島主種子島久時の母である。天正十七年（一五八九）八月五日に四二歳で亡くなった。鉄砲伝来の頃、時の島主種子島時堯が、国上村で鹿狩りをしていた際、のどが渴き人家に立ち寄ったところ、そこに娘がいて、早速天目（湯呑）を鍋のふたに載せて差し出した。はじめの一杯はぬるいお茶を、次はやや熱めのお茶を、最後に熱いお茶を差し出したという。時堯は、この娘の気転が利くことにすっかり感心し、娘を見初めて館に迎えた。そして生まれたのが克時（久時の幼名）である。彼女は、克時を島主の館で育てると、ひ弱な子になるからと、わざわざ種子島の厳寒の地である古田を選び、母子ともに移り住み、克時の心身を鍛え、武芸の修練に励ませた。その甲斐あって、克時

子島の厳寒の地である古田を選び、母子ともに移り住み、克時の心身を鍛え、武芸の修練に励ませた。その甲斐あって、克時



古田御前母子像

は、わずか一六歳でイノシシを組み敷くほどたくましい若者になった。天正八年（二五八〇）十月五日、島津義久より「久」の字を賜り、幼名「克時」改め「久時」となり一六代島主となった。

古田小学校の校庭には、賢母遺蹟碑が建っている。そして、賢母の教えは、古田小学校の校歌にも歌われている。

島津大膳久憲

古田には昔、配所（監獄）があった。寛文三年（一六六三）三月、日置の島津大膳久憲は、公儀流人として古田配所に流されてきた。時の一八代島主久時に対し、島津三家老から、過酷なまでの監視規範が示されている。罪状については、一説に禁制のキリシタンであったといわれるが、定かではない。

同年五月十八日、大膳は、赦免状を持った使者がやってくるのを見て、召し捕りにやってきたと早合点し、獄舎にて縊死してしまった。彼の遺体は、獄舎のあたりに葬られた。

このあたりには、様々な言い伝えがあり、大膳様の墓の見える田浦を馬に乗って行くと、馬が暴れて乗れなくなったり、ここに生えるタケノコを採って食べると腹が痛くなったり、小便してもたると言われた。現在では、旧農協支所周辺をダイゼンサマと呼んでいる。

現在の大膳様の墓碑は、文久二年（一八六二）七月十九日に松寿院（二三代島主久道夫人）が、久憲二〇〇回忌に修復し「生

祥権現宮」と追号して、豊受神社の本殿横に建立したものである。現在もなお、古市民の上妻家子孫が供養している。大膳様の苦しみを、古田区民は、これからも忘れることなく哀悼の誠を捧げるのである。



大膳様の墓碑

第七節 年中行事

一月

元旦歩こう会／元始祭／文化祭（隔年開催）

二月

山の神（石碑）祭り／河津さくら祭り

三月

区民総会／送別会

四月

歓迎会

五月

こどもの日グランドゴルフ大会／ホテル祭り

七月

農休日スポーツ大会／夏季大祭／六月灯／花火大会

九月

古田小学校&校区合同運動会

十月

市民体育祭／願成就

十一月

古田校区敬老会／西之表市駅伝競争大会

十二月

各種団体連絡協議会／忘年会

第八節 史跡等

二本松遺跡

縄文時代草創期（約一万二〇〇〇年前）の隆帯文土器片が採集されている。

発見された当初は、国内ではほかに類例がなかったため、時代不明の土器となっていた。しかし、奥ノ仁田遺跡の発掘調査で同じタイプの土器片が大量に出土し、調査の結果、縄文時代草創期の遺跡だったことから、二本松で採集された土器は、種子島で初めて発見された縄文時代草創期の資料として注目されるようになった。これらは種子島や南九州の縄文時代の始まりの頃の文化を考えるうえで重要なものとなっている。隆帯文土器片は現在、三角山遺跡（中種子町）、横峯遺跡（南種子町）などでも発見されている。

一位山

古田小学校から二本松方面へ約一キロ先にイチイ山と呼ばれる場所がある。イチイ山の名前の由来は、舟の櫓ろの材料になるイチイ（石櫓）という木がこの地でたくさん採れたことによる。イチイは、イチイガシの略でブナ科の常緑樹である。温暖な地方では高さ約三〇メートルに達し、葉の下面は、灰白色の毛で被われている。実は食用となり、味はシイに似ている。材は堅く、

強靱で鋤、鍬の柄、大工土木用具などに用いる。

カシ類では、最も大きくなることから一位樫とも言われる。

種子島気象レーダー

古田小学校から中線（県道七六号）を約三キロ登ると十三番集落がある。種子島で最も高いとされている廻まわりの峰山みね（標高二八二メートル）の高台に種子島気象レーダーが設置されている。設置は、昭和三十四年（一九五九）で、全国一三カ所の気象レーダーのひとつである。

台風や大雨の際には、「種子島レーダー観測所によると」とテレビなどで観測結果が流されている。

この一帯は中種子番地ではあるが、昔から古田校区十三番とは密接な関係があり、小学生の遠足と言えば、かつてはこの地を訪れるものだった。令和三年（二〇二二）に新しい気象レーダーに建て替えられ、現在も活躍している。

紀功碑

古田中央公民館の敷地内に紀功碑が建立されている。天保二年（一八三一）八月八日に生誕し、古田村の発展のため生涯を尽くした榎本新喜をはじめとする古有民の功績を称えた石碑である。

明治の初期、古田村総代であった榎本新喜は、古田村が山間の僻地できわめて小集落であること、耕作田園も狭小であるこ



紀 功 碑

とから、何としてもこの古田の地を開発発展させたいと考えた。そのためには、多くの住民を招き移住させることだと考え、実行実現のために固定資源が必要であることを副総代の高尾野利八（古田区政・初代区長）に相談し快諾された。二人は残る古有民にも相談し、二七戸の古有民全員が固い決意で団結し行動に移した。付近の山林の広区域を共有地に編入するように役所に要望を続け、努力の甲斐あって、当時二〇〇町歩とも言われる山林を共有地とした。将来を見据え、今できることに住民が一元となった努力の賜物である。明治十二年（一八七九）土地改定の際、古田村の戸数は二七戸、住民は一二〇人程度と記されている。

古田校区では、この当時居住していた二七戸の戸主を古有民と呼び、旧暦の一月十六日にあたる日に山の神祭り並びに石碑祭りを開催し、先人の功績に敬意を表し、代々受け継がれている肥沃の山に感謝し、後世へと繋いでいくことを誓っている。

ガロー山
古田校区の中
央部に広がる基
盤整備された田



田の神様

浦の中にこんもりとした土地が現在も存在する。この地にはいくつかの墓地があったとされ、昔から神聖なる場所として関係者以外は足を踏み入れてこなかった。現在は墓も後継子孫宅の近くへと移設され墓石を見ることはない。

田の神様と馬頭観音

古田校区には、田の神様と思われる石碑が一つだけある。田浦の一角に建立されているが、基盤整備前には川沿いの広場に建立されていた。その近くには、小石を積み上げて築かれた馬頭観音もあったという。この馬頭観音は、馬の埋設場の移設に伴いこの地からは姿を消した。

第九節 豊受神社

豊受神社

由来

豊受神社が建立されているこの地には、産土・農耕・武勇三神の蓮勝寺三社が建立されていた。明治初期に全国に発せられた廃仏毀釈により蓮勝寺は廃寺となる。石柱など蓮勝寺の面影を残しながら、大正三年（一九一四）古田の人々の手によって、「とようけのおおみかみ・とようけひめのみこと」を守り神とし、五穀豊穡・村民安泰を祈願して、豊受神社を創建した。

昭和二十八年（一九五三）二代目建て替え、平成十八年（二〇〇六）三代目に建て替えられ、現在に至る。

古田校区には、豊受神社のほかには校区民全員が氏子となって思いを一つにしている。参道横には種子島家の供養塔が並び、古田御前を崇敬してやまない、古田区民の思いが受け継がれている。

大祭

豊受神社の大祭は、年に三回行われている。

一月三日 元始祭 無病息災・安心安全祈願

七月中旬 夏季大祭 水難退散・五穀豊穡

十月中旬 秋季大祭 豊作成就の感謝・神恩感謝

同日境内において戦没者慰霊祭も執り行われる。

願成就

豊受神社の願成就については、神社創建以来、時代とともに開催時期を見直しながら受け継がれている。

昭和十五年以前 十

一月十七日（晩稲の時代）

昭和十六年以降 十

月十七日（早期米への切り替え）

昭和五十年以降 十月第三日曜日（仕事や環境の変化）

秋季大祭が厳かに執り行われたのち、お神楽である獅子舞の奉納が始まり、続いて棒踊の奉納へと続く。このうち豊受神社境内において各集落より、歌や踊りが披露され、手弁当による宴が和やかな雰囲気醸し出すのである。午後三時頃から午後部の奉納が執り行われ、棒踊・獅子舞の順で幕を閉じる。古田の願成就は獅子舞で始まり獅子舞で終わるのが慣例である。

終戦後において中止をみなかった願成就は、新型コロナウイルスの影響で、令和二年（二〇二〇）から三年間休止することとなった。



豊受神社六月灯

第一〇節 郷土芸能

古田獅子舞

由来

明治末期シイタケ栽培のために大分から移住した、川野幸太郎・石井又蔵により地区民に伝えられ、大正三年（一九一四）に大正天皇御即位記念として初披露され、以来毎年豊受神社の願成就のお神楽として奉納されている。

本市は、昭和四十四年（一九六九）に無形民俗文化財に指定した。また、平成十六年（二〇〇四）に鹿児島県の無形民俗文化財に指定された。

特徴

獅子二人と天狗一人と猿二人の五人で舞う。はじめは、獅子を相手に天狗が茶化す。やがて獅子が怒って天狗に襲いかかる。獅子と天狗の激しい争いが続き、一度天狗が負けるが、やがて活気づき、刀と軍配の巧みな操りで、終わりに近づくとき獅子が力尽き後退して



古田獅子舞

いく。猿は、それぞれ獅子、天狗につくが、一定の舞の形はなく、獅子及び天狗の動作をまねしながら、ときどき猿同士が争い、舞の道化役を演じる。鳴物は、大太鼓、小太鼓を二人で交互に叩いていく。横笛を数人で吹きながら舞の調子をとっていく。この横笛は種子島に自生するニガタケで作られる。舞い終わった後に獅子は一〜二歳児の頭を魔よけのためにかむ。健康ですくすく育つようにと願う親子で行列ができる。

由来

古田棒踊

日置郡から安城に移住後、古田に住むようになった上妻次郎が、大正十年、当時青年会員だった上妻静馬等に教えたのが始まりである。その後、毎年豊受神社の願成就の余興として踊り伝えられたものである。

本市は、平成十一年に無形民俗文化財に指定した。

特徴

棒と鎌との打ち合いが特に激しく勇壮な踊りである。入場・棒突き・踊り



古田棒踊

一回目・二回目・退場で構成される。歌やはやしに合わせて踊り、速くて勇ましくテンポの良い踊りである。

歌 詞

- 一 今こそ参る 神に参詣す
- 二 焼野のキジは 岡の背に住む
- 三 オセロが山は 前は大川
- 四 鎌の柄が折れた 三束切りおく

第一節 年 表

和暦(西暦)		古田校区のできごと
長祿2年 (二四五八)		一代島主種子島時氏が古田村に仮住まいする
天正8年 (一五八〇)		種子島久時、幼名「克時」から改め一六代島主となる
天正17年 (一五八九)		古田御前逝去
寛文3年 (一六六三)		島津大膳久憲配流され獄中にて、縊死する
寛政元年 (一七八九)		蓮勝寺、御穀神酒を納める
嘉永3年 (一八五〇)		大風にて倒壊家屋一一戸
明治		
15年(一八八二)		安城戸長役場管内より古田村が分離、独立する
19年(一八八六)		上之町に甌島から移住
20年(一八八七)		上之町火災十軒長屋焼失
26年(一八九三)		古田簡易小学校開校
28年(一九〇三)		下西・国上・伊関・安納・現和・古田・住吉各校に御真影奉戴
36年(一九〇三)		小学校校舎改築落成
37年(一九〇四)		賢母の遺跡、校庭に建立
		北種子村と明泰寺字造林契約する。五〇町歩七〇年間貸与

和暦(西暦)	古田校区のびやう
42年(一九〇九)	番屋峯に静岡から移住 上清戸蔵字直宮林として北種子村に貸与
大正	
3年(一九一四)	桜島大爆発により罹災者、種子島に移住。平松・二本松・大枯木
6年(一九一七)	平松、桜島移住記念碑建立
7年(一九一八)	八代祐基、五ノ熔鋸炉建設
13年(一九二四)	国上、古田に腸チフス発生 西之表茶業組合結成
昭和	
2年(一九二七)	種子島第二発電所(出力六〇キロワット)運転開始
9年(一九三四)	皇太子殿下御誕生記念林の碑を明泰寺入口に建立
10年(一九三五)	陸軍演習行事記念の碑、十三番、移住記念の碑建立
13年(一九三八)	紀功碑(榎本新喜翁碑)建立
14年(一九三九)	古田公会堂落成
15年(一九四〇)	統一林野事業終了
20年(一九四五)	小学二、六年生、学童疎開(伊佐郡菱刈町方面) 西之表町義勇隊組織編制
22年(一九四七)	古田、中割地区に駐屯町民を動員 八月十五日終戦。十月一日から疎開学童順次帰島 種子島守備隊第一三五七三部隊が、鹿の峰の巨石に誠の字を刻む 新教育制度六三三制実施。榕城・安城・古田・住吉中学校開校

和暦(西暦)	古田校区のびやう
25年(一九五〇)	古田中学校校舎落成 番屋峯茶業記念碑建立
28年(一九五三)	上之町、部落創設記念碑建立
30年(一九五五)	古田中学校農畜舎落成
33年(一九五八)	二本松、移住記念碑建立
34年(一九五九)	気象レーダー観測開始
35年(一九六〇)	第二古田橋架設
37年(一九六二)	第一古田橋架設
40年(一九六五)	古田簡易水道供給開始
42年(一九六七)	古田小学校体育館竣工 古田校区パイロット事業開始
44年(一九六九)	戦没者慰霊碑建立(豊受神社内) 丸野農道、田代農道整備
46年(一九七一)	獅子舞保存会発足 一位山農道整備
48年(一九七三)	古田へき地保育園開設 番屋峯内農道整備
49年(一九七四)	二本松農道整備
52年(一九七七)	古田で積雪七センチメートル観測
53年(一九七八)	古田中学校新校舎落成
55年(一九八〇)	第三上之町橋架設 古田校区運動公園県単村づくり事業 二本松公民館、十三番公民館新築

		和暦(西暦)
		古田校区のできごと
	57年(一九八二)	平松公民館新築 多目的研修センター開設
	60年(一九八五)	番屋峯公民館増改築 村之町公民館新築 鹿の峰林道完成 古田中央公民館焼失
	62年(一九八七)	古田中央公民館新築 中之町公民館新築 古田小学校創立一〇〇周年記念行事 上之町移住一〇〇周年記念 上之町公民館落成祝賀会
	63年(一九八八)	古田地区文化祭
平成	元年(一九八九)	古田中学校グラウンド整備
	3年(一九九一)	古田地区「からも交流」実施
	5年(一九九三)	古田駐在所新築
	6年(一九九四)	南部水道通水開始
	8年(一九九六)	古田中学校創立五〇周年
	10年(一九九八)	古田バイパス開通式
	12年(二〇〇〇)	県営田浦圃場整備開始
	13年(二〇〇一)	大水害発生。激甚災害となる
	14年(二〇〇二)	種子島茶生産組合三〇周年
	15年(二〇〇三)	市道番屋峯、十三番線改良工事
	17年(二〇〇五)	県営田浦圃場整備完了祝賀会

		和暦(西暦)
		古田校区のできごと
	18年(二〇〇六)	豊受神社新築落成
	19年(二〇〇七)	鹿兒島県PTA活動研究委嘱公開(古田小学校、古田中学校)
	21年(二〇〇九)	古田中学校閉校式 高齢者交通安全いきいきクラブ発足 番屋峯移住一〇〇周年記念事業
	22年(二〇一〇)	広掛茶団地中山間造成事業
	24年(二〇一二)	種子島ひめ竹生産組合発足。 宝くじ助成事業で備品購入
	25年(二〇一三)	獅子舞伝承一〇〇周年記念事業。 古田元気クラブ発足
	26年(二〇一四)	古田区会地縁団体認可
	27年(二〇一五)	古田保育園閉園 中之町ドリムプロジェクト発足 多世代交流事業採択
	28年(二〇一六)	古田放課後児童クラブ発足 水力発電復活プロジェクト発足
	29年(二〇一七)	古田中央公民館、女子トイレと炊事場を改修
	30年(二〇一八)	加工センター改修(地域振興事業) 古田中央公民館 瓦塗装工事、シロアリ駆除 中之町雑用水設備完了 大田橋架け替え完了 市政施行六〇周年郷土芸能披露
令和	元年(二〇一九)	西之表市地域づくり優良団体として古田女性部優 秀賞受賞

和暦（西暦）	古田校区のできごと
2年(二〇二〇)	古田地区地籍調査開始 鹿の峰林道生コン舗装開始 古田中央公民館男子トイレ、畳表替え 古田老人クラブが国土交通大臣賞受賞 古田元気会が西之表市健康づくり功労賞受賞
3年(二〇二二)	古田区営住宅五棟運用開始 自主防災組織、防災倉庫設置 課題解決ワークショップ開催 プロレス in 古田開催
4年(二〇二三)	古田中央公民館、エアコン設置 豊受神社駐車場整備 安城、立山、古田 三校区によるキッチンカー（もよゝて）運用開始

暮らしの風景写真



番屋峯の茶畑



古田水力発電所堰堤



昔の古田の街並み



初代豊受神社